

白 河

S H I R A K A W A



が響き合うまち



白河市勢要覧

第一章 「白河の楽しみ」

- 自然 自然体の心が広がるまち……4
- 歴史・文化 静かに、そこにある遊び……8
- 食 豊かな風土と歴史が育んだ味わい……12
- 特集 白河楽考 ……14
 - 子どもたちが夢見る まちの楽しい未来
 - 大人たちが進める 白河の楽しい魅力づくり

第二章 「白河の楽」

- まちづくりの理念 ……20
- 安全・安心に暮らせる人にやさしいまち…21
- いきいきと健やかで明るい笑顔があふれるまち ……22
- 地域資源を生かし産業を育て、雇用を生むまち ……23
- 心豊かに学び・ともにふれあい・生きる喜びを実感できるまち ……24
- 快適でやすらぎのある住みよいまち……25
- 自然と共生し、潤いのある環境を未来につなぐまち ……26
- 地域のふれあいと支え合いで共に創るまち……27

白河彩景 ……28

数字で見る白河 ……30

- 発刊にあたって 白河市長 鈴木和夫
- 白河市の概要／市章・市の花・木・鳥 ……31

楽翁——それは今から約二百年前、傑出した名君として白河を治めた松平定信の隠退後の雅号です。その遺徳は、今日まで市民に慕われ続けています。

定信は茶の湯の造詣も深く、今に残る「茶道訓」や「茶事掟」などの著書を見ると、質朴・質素などの考えが記されています。

決して華美ではなく、自然でさらりとした清廉さを、白河の人々は愛してきました。白河は、まちそのものが自然体。美・味・ふるまい・暮らし……あらゆる面でその精神は受け継がれています。

南湖は、「身分の分け隔てなく共に楽しもう」という定信の『土民共楽』の理念を基に造営されました。今に残る茶室「共楽亭」にその想いが反映されています。

「楽」しくあれ——楽翁の想いが、今も白河に息づいています。



【松平定信】

1787年から6年間江戸幕府老中首座を務め、寛政の改革を行うなど幕府立て直しに尽力。白河藩政にあつては「土民共楽」の理念に基づき南湖の造営を行うなど、名君として知られています。

松平楽翁像／福島県立博物館蔵



「楽」それは白河のまんなかにある言葉。

自然

自然体の心が広がるまち

「作るべき庭は地勢に従い、
できるだけ自然に近い形をまねる、
あるいは残すべきである」
これは、生涯に五つもの庭を築いた定信の庭園観です。
自然のものは自然のままに残す——
私たちが未来に遺すべき理想の風景が
ここにあります。



【南湖公園】

白河藩主・松平定信が「士民共楽」の理念に基づき享和元年(1801)に造営した、庭園の要素も取り入れた公園。大正13年に国の史跡名勝に指定。

民楽 士共

四季折々に人々が楽しむ のびやかな自然の美しさ

白 河藩主であった松平定信(隠退後は楽翁)は、その政治的手腕にとどまらず、文化的素養にも秀でた人物でした。作庭にも造詣が深く、南湖は定信が造った公園として知られています。南湖の開発は、新田開発のための灌漑工事が出発点でしたが、そこに庭園の手法を取り入れたばかりか近代的な思想まで加えて整備したところに、定信の卓越した考え方がうかがわれます。

それまで諸藩にあった大名庭園というものは、あくまで藩主とその家族のものでした。それに対し、南湖はいつでも身分の分け隔てなく、武士も庶民も共に楽しむという「士民共楽」の理念のもとに造営され、開放されました。その完成は、身分制度の厳しかった江戸時代において先駆的な「パブリックガーデン＝公園」の誕生といえるかもしれません。
定信は、自然の地形を生かしながら、あまり手を加えずに南湖を造営しています。近年、全国各地で盛んに行われている「美しい景観づくり」は、まさに「自然のものを自然のままに」残すことが理想ですが、そんな自然体の姿が今から二百年余りも前に白河の地に生まれていたのです。

南湖公園が四季折々に見せる様々な表情は、それぞれに美しく、今も訪れる人々を楽しませてくれます。

【共楽亭】

「身分の高い低いに関係なく、共に楽しもう」——そんな考えのもと、定信が湖南北側に建てた茶室「共楽亭」は、当時から庶民にも開放されていました。





夕焼けの南湖公園



大池の白鳥



南湖公園の散策路



白河関の森公園のカタクリ

大信不動滝

四季 楽 彩

美しい自然が身近にある、
心やすらぐ幸せなひとときをいつまでも

白

河市の西側、那須山系・甲子高原のふところ深くには、福島県を縦貫する阿武隈川の源があります。那須連峰の美しい山々を仰ぎ、里に清冽な水が流れる恵まれた環境のもと、ふもとのまち・白河では、豊かな自然が育まれています。春には、眠っていた彩りがいっせいに咲き、夏はうっそうたる緑が茂る中、涼やかな水辺に人々が集います。稲穂が黄金色に輝く秋は、燃えるような紅葉の美しさが胸の奥までしみわたり、雪積もる冬の風景には深い静寂が広がります。その移り変わりを、市民の誰もが愛し、親しんでいます。

心やすらぐ風景が四季折々に広がる白河の地は、高原の爽やか

な気候のもと、遙かなる時代から自然の恵みに支えられてきました。人々は、日々の暮らしの中で手つかずの自然を大切にするとともに、南湖公園や白河関の森公園など、自然に気軽に親しめる空間の整備に力を注いできました。とりわけ近年、南湖の松枯れ対策として一部車の通行止めを実現したり、また、阿武隈川沿いに紅しだれ桜を植樹したりと、様々な取り組みが市民参加のもと行われ、着実に成果をあげています。

自然は、何もせずに守られるものではありません。「美しい自然は市民の財産」という意識と行動が、白河の美しい未来へとつながっていきます。

nature angle



不動清水のビャッコイ

表郷地域の清水流中にのみ自生する水草。氷河期の名残をとどめる神秘的な植物で、このほかには世界でもスウェーデンでしか見られない大変貴重な多年草です。茎は細く、横に這うように枝を伸ばすビャッコイは、水がきれいな湧水口の水温が一定のところしか自生できないといわれ、表郷地域の中でも金山・瀬戸原地内のみで生息しています。

文歴 化史

静かに、そこにある歓び

悠久の昔よりつづられてきた遙かな地への憧れ。
平安の歌人が歌枕として「白河の関」を詠み込み、
以来、幾多の風流人たちがこの地に憧れ、あるいはこの地を目指しました。
見果てぬ夢をみちのくに馳せ、残された数多くの歌。
遙かな思いをよそに、関跡はただ静かに佇んでいます。

史跡 白河関跡

【白河関跡】

人や物資の往来を監視するための関で、奈良・平安時代に機能していたと考えられています。廃関後は歌枕（和歌の名所）として都人の憧れの地となり、多くの歌人たちに詠まれました。



超 楽
時 響

時を超え人と人の心が
結び合う憧憬の地

白河の関——。陸奥を往来する人や物資を監視する関の関は、八世紀末の文献に初めてその名を現しますが、十世紀後半にもなると、その機能が次第に失われていきました。しかしやがて、幾多のいにしえの歌人たちが、この白河の関に思いを寄せ、歌枕として知られるようになり、ます。能因法師の歌「都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関」が評判を呼ぶと、西

行、一遍上人、宗久、心敬、宗祇、そして松尾芭蕉と、そうそうたる風流人たちが関に憧れ、訪れようとしていました。

幽玄な杉木立の中に、ひっそりと関跡の碑が建っており、長い石段の丘頂に白河神社が鎮座しています。樹葉からもれる陽の光が苔むした石段の上に落ちる風景の中に、幾多の歌人たちが佇み、時を超えて歌心を呼び起こされたことでしょう。すべては静まり返っ

ています。

歌枕として現在までの長い間、詩歌の世界で生き続けた白河の関は、歌人たちにとってずっと夢や浪漫を与えてくれる憧憬の地でした。とりわけ、天下の名文『奥の細道』の旅で、春立てる霞の空



【芭蕉・曾良像】

かねてより思いを寄せていたみちのく路の関門「白河の関」跡に立ち、感慨にひたっているかのような芭蕉・曾良の像が、白河関の森公園に建っています。

に、白河の関越えんと、決意して旅立った松尾芭蕉にとって、白河の関はまず第一の勘所だったのではないでしょうか。関跡に隣接する白河関の森公園には芭蕉とその門人曾良の像が建ち、現代の風流人たちを静かに見つめています。



白河だるま市



小峰城（震災前）

白河提灯まつり

古魂
伝楽

伝統、その魂を受け継ぐことは
白河に生まれ育った白河人たるあかし

history
angle



白河だるま

松平定信が城下で旧暦の正月に行われたその年の初市「市神祭（花市）」に、縁起物のだるまを売り物として出すため、だるまの顔をお抱え絵師の谷文晁に描かせたと伝えられています。まゆは鶴、ひげは亀、びんは松と梅、あごひげに竹をあしらった福々しい「白河鶴亀松竹梅だるま」として名高い、縁起のよいだるまです。

小 峰城は十四世紀中頃、結城親朝によって築かれたと伝えられます。現在の小峰城は、江戸時代に初代白河藩主となった丹羽長重が改築した平山城で、奥州の押さえとして親藩・譜代の大名が居城しました。明治維新前の戊辰戦争で落城。城郭は戦火にあって焼失しましたが、平成三年に三重櫓を復元。これには、白河における戊辰戦争の激戦地・稲荷山の杉材を使用したため、床板や柱には当時の弾痕がそのまま残っています。平成六年には前御門も復元しました。東日本大震災により崩落した石垣は、現在修復中ですが、威風堂々たる小峰城は健在で、白河のシンボルとして広く市民に親しまれています。

様々な古い伝統を守り続け、現代へと受け継ぎ、紡がれてきた白河の歴史。そこには、ここで暮らす人々の誇りが息づいています。





第一楽章

食

美味 悦楽

豊かな風土と
歴史が育んだ味わい

極上の味は
白河の大地から
生まれる

多彩な風味が白河らしさ、
その魅力は私たちの宝物

透

き通る清涼な水や高原の空気に恵まれた白河市では、数多くの美味が育まれてきました。古くから知られるそばは、松平定信が、白河高原の風土に合った作物として、冷害に強いそばの栽培を奨励したことが背景にあります。冷涼な気候であり冷たい水がふんだんにある——おいしいそばを作る条件を備えた白河は、盛岡・信州・出雲とともに、日本四大そばどころの一つともいわれており、今も市内の多くのそば屋がその味わいを競っています。

麺のもう一つの名物、ラーメンは、大正時代に最初のラーメン店が現れました。このラーメン店の弟子たちが市内に店を構え、競うように技術の錬磨と伝承に努

めてきたことが、近年のラーメンブームともあいまって、今日では約百軒のラーメン店でおいしい白河ラーメンを提供しています。心地よい歯ごたえの手打ち縮れ麺と、コクがありながらサッパリとした味わいのしょうゆ味のスープに特徴があり、広く支持されています。

また、和菓子のお舗があるのは、城下町の特色の一つです。楽翁が好んだ茶道とともに、お菓子里も白河の粋が凝らされてきました。時代の茶人たちが優れた菓子職人を育ててきた歴史があり、風流な銘菓からは、白河の文化の香りを感じるができます。ほかに、庶民の味ともいえる南湖だんごや煎餅など、多彩な菓子文化も魅力です。

白河の風土や気質によって育まれてきた様々な「食」は、白河らしさを伝えていく大切な宝物です。

food
angle



清酒

清涼な地下水と澄んだ空気のもと、地元でとれる極上米を原料に、香り高く芳醇な銘酒が造られます。天の恵みと造り手の思いがしっかりと醸し出された一品です。スーッと飲みやすく、それでいてグッとくる旨さがあります。近年では、表郷地域の「びゃっこの泉」、大信地域の「初舞台」など、地域で「うまい酒」を造る取り組みが行われています。